

Ⅱ 平成18年度宮城県学習状況調査・学習意識調査 結果の概要

1 学習状況調査の結果の概要

(1) 正答率60%以上の問題の割合

本県では、平成14年度調査から、「正答率60%以上の問題の割合」を学習内容定着の目安としており、「6割を超えた」場合に、「学習内容がおおむね定着している」としている。

今年度の「正答率60%以上の問題の割合」は、表1のとおりである。

表1 正答率60%以上の問題の割合（数字は%，比較は4県全体との比較）

	小学5年生					中学2年生					
	国語	社会	算数	理科	全体	国語	社会	数学	理科	英語	全体
宮城県	71.0	74.1	81.8	62.9	72.2	59.4	36.4	53.3	42.9	60.0	50.0
4県全体	71.0	70.4	78.8	57.1	69.0	59.4	39.4	53.3	37.1	60.0	49.4
比較	—	3.7	3.0	5.8	3.2	—	▲3.0	—	5.8	—	0.6

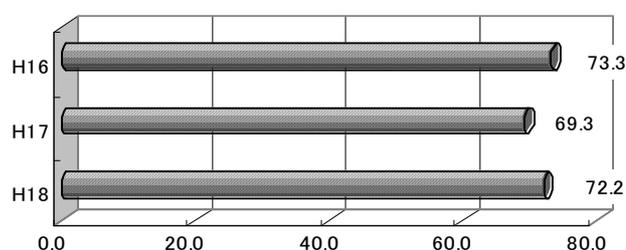
① 小学校の状況

国語、社会、算数、理科のすべての教科で、「正答率60%以上の問題の割合」が6割を超えており、4教科全体の正答率60%以上の問題の割合も72.2%（126問中91問）となり、前年度（69.3%）を2.9ポイント上回る結果となった。

「4県全体」との比較においても、社会、算数、理科の3教科で上回っており、全体でも3.2ポイント上回った。

小学校については、基礎的・基本的な内容についておおむね定着していると判断している。

図1 正答率60%以上の問題の割合（小学校）



② 中学校の状況

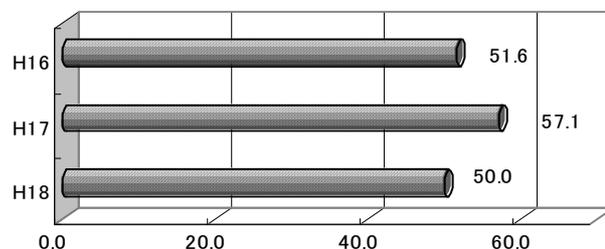
英語を除く4教科で、6割に達しなかった（表1参照）。

5教科全体の正答率60%以上の問題の割合は50.0%となり、前年度（57.1%）を7.1ポイント下回った。

「4県全体」との比較では、国語、数学、英語は同程度であった。社会は3.0ポイント下回り、理科は5.8ポイント上回った。

中学校については、「正答率60%以上の問題」の割合が6割に達していない結果となり、一層の授業改善が求められる結果となった。

図2 正答率60%以上の問題の割合（中学校）



(2) 平均正答率

① 小学校の状況

すべての教科で4県全体の平均正答率を上回っており、4教科の総合正答率（68.8%）でも4県（67.8%）を1.0ポイント上回った。

表2 小学校一各教科の平均正答率（数字は%，比較は4県全体との比較）

教科	平成16年度			平成17年度			平成18年度		
	宮城県	4県全体	比較	宮城県	4県全体	比較	宮城県	4県全体	比較
国語	68.8	70.4	▲1.6	69.5	71.3	▲1.8	72.0	71.9	0.1
社会	74.4	75.7	▲1.3	76.8	77.5	▲0.7	70.2	68.6	1.6
算数	71.0	72.7	▲1.7	68.4	70.4	▲2.0	70.3	69.5	0.8
理科	63.8	65.0	▲1.2	61.0	62.6	▲1.6	62.7	61.3	1.4
4教科	69.5	71.0	▲1.5	68.9	70.4	▲1.5	68.8	67.8	1.0

② 中学校の状況

数学で4県全体の平均正答率を0.2ポイント下回ったが、理科及び英語で4県全体平均正答率を1ポイント以上上回るなど、4教科で4県全体を上回る結果となった。

5教科の総合正答率(60.2%)でも4県(59.7%)を0.5ポイント上回った。

表3 中学校—各教科の平均正答率(数字は%, 比較は4県全体との比較)

教科	平成16年度			平成17年度			平成18年度		
	宮城県	4県全体	比較	宮城県	4県全体	比較	宮城県	4県全体	比較
国語	73.0	73.6	▲0.6	70.0	70.6	▲0.6	66.4	66.0	0.4
社会	51.0	52.1	▲1.1	57.2	57.6	▲0.4	56.2	56.0	0.2
数学	56.2	57.1	▲0.9	59.6	59.9	▲0.3	57.4	57.6	▲0.2
理科	50.6	51.6	▲1.0	59.7	60.0	▲0.3	54.7	53.6	1.1
英語	69.1	69.3	▲0.2	66.7	66.5	0.2	66.3	65.3	1.0
5教科	60.0	60.7	▲0.7	62.6	62.9	▲0.3	60.2	59.7	0.5

「正答率60%以上の問題の割合」及び「平均正答率」の分析結果から、本県の小・中学生は、基礎的・基本的な内容については、「おおむね定着している」と判断している。

しかし、中学校については、正答率60%以上の割合が50.0%と60%に達していないことから、中学校の学力の全体的な底上げが求められる結果となった。

(3) 出題形式による結果分析

表4 出題形式別正答率(数字は%)

出題形式	小学5年生					中学2年生					
	国語	社会	算数	理科	全体	国語	社会	数学	理科	英語	全体
選択式	72.0	72.1	70.8	71.0	71.5	66.4	59.7	60.6	58.3	71.0	63.3
記述式	75.2	66.9	73.3	54.7	68.2	67.4	47.7	57.3	49.4	47.7	56.8
論述式	57.9	61.4	40.3	38.5	50.4	64.2	31.6	23.7	36.0	47.7	47.9

表5 出題形式別無解答率(数字は%)

出題形式	小学5年生					中学2年生					
	国語	社会	算数	理科	全体	国語	社会	数学	理科	英語	全体
選択式	1.4	1.0	1.3	1.0	1.1	0.7	1.8	2.9	1.3	0.7	1.4
記述式	8.9	3.4	3.9	9.0	6.4	13.0	9.1	10.8	9.5	32.2	11.4
論述式	13.7	6.4	20.5	17.1	14.4	10.7	30.0	23.7	22.9	18.9	20.0

小・中学校とも選択式の正答率の平均が最も高く、論述式が最も低い結果となった。

無解答の割合は、論述式が小学校で14.4%、中学校で20.0%と最も高かった。国語では小・中とも「読む能力」で無解答率15%以上、社会では資料や図から読み取ったことを論述する問題で無解答率25%以上など、長文や図表から読み取ったことを論述する問題や思考力を問う問題で無解答率が高いなど、読解力や表現力に依然として課題がみられる結果となった。

(4) 4県全体正答率の乖離の大きい問題

表6 本県正答率が4県全体正答率を1ポイント以上下回った問題

出題形式	小学5年生					中学2年生					
	国語	社会	算数	理科	全体	国語	社会	数学	理科	英語	全体
問題数	31	27	33	35	126	32	33	30	35	30	160
該当問題数	7	3	6	6	22	8	9	11	10	1	39
割合	23%	11%	18%	17%	17%	25%	27%	37%	29%	3%	24%

国語では、「厳」「複雑」の漢字を書く問題や「容易」の読みを書く問題などで5ポイントを越えて下回るなど、小・中ともに言語事項を中心に乖離がみられた。算数・数学では、基礎的・基本的な「知識理解」「表現処理」の能力を問う問題が17問中16問、理科では「知識理解」「技能表現」の能力を問う問題が16問中10問であった。社会でも小・中とも都道府県の位置と名称を問う問題に乖離がみられた。

以上から、基礎的・基本的な内容については、「おおむね定着している」と判断しているものの、基礎・基本の確実な定着が本県の課題として浮かび上がる結果となった。

(5) 各教科の課題と改善方策

【小学校】

教科	課題	改善の方向
国語	<ul style="list-style-type: none"> ○字数や段落構成を意識して書くこと ○叙述に即して読む力を高めること ○表現・理解につながる言語事項の定着を図ること 	<ul style="list-style-type: none"> ○様々な条件のもとで、書く機会を多く設定する。また、意欲を喚起する課題を提示したり、ねらいを明確にした例文を示したりするなど、書き方のスキルを高める工夫をする。 ○「情景」や「心情」、「事実」と「意見」等に気をつけさせながら、目的意識を持って読ませる。また、叙述に着目して考えさせる課題や発問を工夫する。 ○漢字やローマ字、表現技法、辞書の活用等、学習したことを、授業だけでなく日常生活においても繰り返し使用する場を増やす。また、定着率の低い漢字、ローマ字等を重点的に取り扱う。
社会	<ul style="list-style-type: none"> ○消防施設や設備の設置状況、交通安全を守るための設備について、その目的を正しく考察すること ○都道府県名の位置と名称について理解することや地図を読み取ること 	<ul style="list-style-type: none"> ○調べる活動では、目的や動機、そして、その見学・調査の仕方を事前に確認させる。また、「見た」こと「聞いた」ことから「考える」活動を位置づけ、「事実の把握」から「意味の理解」へとつなげたい。 ○日常の学習の中で、地図帳を活用する機会を増やす。都道府県名が出てきた時には、地図帳でその位置を確認させる。白地図を利用し、都道府県名とその位置を一致させるなど具体的な作業活動を通して、地図を読み取る学習を充実させる。
算数	<ul style="list-style-type: none"> ○計算や数量の意味を実際の場面と結び付けて理解すること ○数量や図形の関係を図や式に表したり、根拠を明確にしながら説明したりする力を身に付けること 	<ul style="list-style-type: none"> ○作業的・体験的な活動など算数的活動を積極的に取り入れるとともに、日常生活と結び付けて考える機会を設ける。 ○既習事項を基に、図や式などを用いて自分の考えを書いたり、積極的に算数の用語や記号を使って説明したりする機会を設定する。 ○互いの考えの共通点や相違点を整理しながら、簡潔性や能率性などについて観点を明確にして比較・検討させ、数理的処理のよさに気付かせる。
理科	<ul style="list-style-type: none"> ○実験結果をグラフ化したり、図示したりするなど、実験の結果を記録・処理する能力や文章で表現する能力を身につけること。 ○比較したり関係付けたりしながら調べる力や観察、実験した内容を日常の生活と関連付けて考える力を身につけること。 	<ul style="list-style-type: none"> ○観察、実験にあたっては、児童一人一人が結果を記録したり、グラフに表したりする機会を多く取り入れるとともに、その時間の確保にも努める。また、仮説や予想、結果や考察、まとめ等を文章で書かせる機会を多く設定する。 ○観察、実験の導入段階で、その内容に関連する事象に目を向けさせるよう、発問等を工夫する。また、観察、実験後に、日常の生活場面での適用例を見付けさせる。なお、観察、実験においては、具体的な比較の視点を示して取り組ませたり、思考の錬りあいの場を確保したりする。

【中学校】

教科	課題	改善の方向
国語	<ul style="list-style-type: none"> ○ねらいや観点を明確にすることで、叙述に即して読む力を高めていくこと ○漢字の読み書き及び筆順、文法的事項など言語に関する知識を身に付けること 	<ul style="list-style-type: none"> ○工夫された表現や語句の効果的な使い方に目を向けさせ、心情や情景とのつながりを考えさせる。 ○毎時間のねらいを明確にし、3領域の関連付けを図るとともに、身に付けさせたい言語事項についての取り上げ指導を計画的継続的に取り組む。 ○言語事項が正確に身に付くよう、言語の係わる教室環境の整備に心がける。
社会	<ul style="list-style-type: none"> ○都道府県の位置と名称についての知識を身に付けること ○地形図の見方で地図上の距離換算についての技能を高めること ○歴史の大きな流れや特色についての理解を深めること ○社会的事象の意味などについて書く（表現する）力を高めること 	<ul style="list-style-type: none"> ○日常的に地図を利用できる学習環境を整えるとともに、白地図等を積極的に授業で活用し、位置と名称を関連付けてとらえさせる。 ○大縮尺の身近な地域の地図を活用し、生徒自身が距離換算の問題づくりを行うなど、主体的に学習に取り組ませるよう工夫する。 ○個々の歴史的事象を関連付けて各時代を整理させ、歴史の大きな流れをつかませるとともに、既習の時代と比較することで、違いや共通点を見つけさせ、特色を理解させる。 ○ノートやワークシートを活用し、資料や根拠を基に自分の考えを書かせたり、学習のポイントをまとめさせる活動を計画的に取り入れ、書くことへの抵抗感を和らげる。
数学	<ul style="list-style-type: none"> ○具体的な問題状況を正しく理解し、文字を用いて数量関係を式に表し解決する力を身に付けること ○空間図形における直線と平面の位置関係について考察する力や見取図と展開図の対応する部分の長さ等を求める力を身に付けること 	<ul style="list-style-type: none"> ○事象の中から関係や法則を数理的にとらえ、数学的に考察し処理する能力を高める必要がある。そのためには、具体的な事象の中から二つの数量を取り出し、その数量の関係や法則に着目して表、式、グラフに表現する活動を通して、関数的な見方や考え方のよさを味わわせる体験を積ませる必要がある。 ○空間図形について考察する力を育成するには、平面に描かれた見取図や展開図から立体を具体的にイメージさせることが必要である。そのためには、展開図から立体を作ったり、作った立体を見取図に描いたりする体験を十分に積ませる必要がある。
理科	<ul style="list-style-type: none"> ○観察、実験において、技能の習熟を図るとともに、生徒が自らの課題意識をもって、主体的に観察、実験に取り組むこと。 ○観察、実験結果の考察を重視し、科学的な思考力を高めること。 	<ul style="list-style-type: none"> ○観察、実験の視点を具体的に示し、条件を整理して、事象における制御要因の関連を的確にとらえさせる。 ○観察、実験の個別化を図るとともに、3年間を見通して観察、実験を行い、基本的な技能の習得を図る。 ○実物に触れる機会を確保し、直接体験を重視するとともに、必要な情報の提供に配慮し、総合的な考察ができるようにする。 ○観察、実験の結果と結論を分けて説明したり、事象を関連付けて推論したりする活動を充実させ、表現する力を高める工夫をする。
英語	<ul style="list-style-type: none"> ○基本的な語彙、基本構文や慣用句の理解を図り、伝えたいことを書く力を身に付けること。 ○長文の概要・要点を理解し、大意を読み取る力を身に付けること 	<ul style="list-style-type: none"> ○基本構文や慣用句については、英語を聞いたり読んだりする機会を増やし、反復練習することにより、語彙や構文の定着を図る。 ○書く活動では、身近なテーマについて、具体的な事実や考えを整理するための手だてを工夫し、伝えようとする姿勢づくりを図り、書く活動への抵抗感を和らげる。 ○英文を読む時間を確保し、内容を把握させるために手がかりとなる語句や表現を与えるなどして、読み取りの指導を工夫する。 ○インターネット等を活用し、身近なニュースや教科書のトピックに関連する資料を読み物教材として与えるなど、読むことの楽しさを味わわせる。

(6) 学習意識調査の結果の概要

【児童生徒対象調査】

() 数値は前年度比

項目	観 点	結 果 (特徴等)
学習意識 に対する	①学習の大切さ	小学生の 92%, 中学生の 88%が勉強は大切だと考えており, やや増加傾向にある。
	②学習する理由	小学生の 92%, 中学生の 82%が勉強は普段の生活や社会に出て役立つと考えている。
	③学習意欲	小学生の 82%, 中学生の 72%が普段の生活や社会に出て役立つ勉強をしたいと思っている。
学校での学習状況	①授業の理解	小学生の 73%, 中学生の 56%が学校の勉強が分かると回答している。
	②分からない場合の対応	小学生は「友人(56%), 家族(51%), 先生(44%)」の順にたずね, 中学生は「友人(60%), 自分で調べる(39%), 先生(35%)」の順になっている。
	③始業前の準備	小学生の 62%, 中学生の 69%が始業前に教科書等を準備している。
	④教材等の準備	小・中学生とも 83%が学校に持っていくものを事前(前日等)に確認している。
家庭での学習状況	①家庭での学習時間	平日 30 分以上学習(塾等を含む)している小学生の割合は 74% (+4.0%), 1 時間以上学習している中学生の割合は 53% (+0.4%) となっている。
	②学校の宿題(程度)	小学生の 93%はほぼ毎日宿題が出されているが, 中学生は 19%であり, 46%は週 1 回, 又はほとんど出されていない。
	③学校の宿題(教科)	宿題の中で多く出される教科は, 小学生は国語(88%), 算数(88%), 中学生は数学(63%), 英語(65%)。
	④家庭での学習内容	小学生の 75%, 中学生の 69%が宿題があれば学習し, 宿題以外の予習・復習をするのは小学生 39%, 中学生 36%となっている。また, テストの前には小学生の 38%, 中学生の 72%が学習している。
	⑤家庭での学習環境	小学生の 91%, 中学生の 56%が, 家族から教えてもらっている。
学習科目以外の	①読書時間	平日の読書時間が 1 日 30 分未満の小学生は 74% (-1.4%), 中学生は 73% (-2.6%) となっている。
	②情報を得る手段	小学生の 84%, 中学生の 89%がテレビから情報を得ており, 次いで新聞や本・雑誌の順となっている。インターネットから情報を得ているのは, 小学生の 20%, 中学生の 30%である。
生活習慣等	①家庭での過ごし方	小・中学生とも「テレビ, ビデオ」「ゲーム, パソコン」の順となっている。
	②睡眠時間	小学生の 79%, 中学生の 27%が 8 時間以上の睡眠をとっている。
	③朝食をとる習慣	小学生の 96%, 中学生の 93%が朝食をとっている。

【教師対象調査】

- 学習指導を進める上で, 留意していることとして, 「基礎的な知識・技能の定着(小 98.9%, 中 99.7%)」や「基礎的な学習事項の反復練習の導入」(小 98.6%, 中 95.3%), 「補充的な学習を授業に取り入れる」(小 95.4%, 中 91.2%) など, 基礎的・基本的な学習事項の定着を心がけている教員が多い。
- 宿題の内容は復習を中心(小 84.1%, 中 67.5%)に課題を出している教員が多い。

【保護者対象調査】

- 学習習慣形成のために家庭が心がけていることでは, 小学生の保護者は「子どもの努力をほめる」(64.9%)が一番多く, 次いで「本や新聞を読むようにすすめる」(34.7%), 「子どもに勉強を教える」(33.8%)となっている。中学生の保護者は, 「将来の進路についての話をする」(57.9%)が一番多く, 「子どもの努力をほめる」(50.9%)「本や新聞を読むようにすすめる」(30.1%)の順となっている。
- 「今後学校に望むもの」として, 小中学校とも「一人一人に応じた指導時間の増」が最も高い割合を占めており, 次いで「年間授業時数の増」や「放課後等の補習学習の実施」, 「学習相談の機会の増」が多く挙げられている。

Ⅲ 「授業改善のヒント」活用の手引

次の章では、各教科の詳細な結果分析に基づき、本県児童生徒の課題を明らかにするとともに、授業改善のための具体的な取組について提案を行っている。

以下に示す各項目のねらいを踏まえ、授業改善のために各学校で活用されるよう期待するものである。

1 県全体の状況

(1) 正答率 60%以上の問題の割合

- ・本県が「学習内容の定着の目安」としている「正答率 60%以上の問題の割合」について、平成17、18年度の割合を示している。
- ・正答率の各段階の割合も示している。「正答率 40%未満」の問題については、特に注意して見る必要がある。

(2) 観点別正答率

- ・教科の観点別の正答率を示している。

(3) 問題内容別正答率

- ・問題の内容別の正答率を示しており、単元別等の定着の状況を把握することができる。

2 定着が良好な領域や単元等

- ・十分に定着しており、一層の向上が期待される領域や単元等を示している。

3 指導法の工夫改善が必要な領域や単元等

- ・定着が不十分であり、指導法の工夫改善が必要な領域や単元等を示している。
- ・具体的問題を取り上げ、「授業改善のヒント」を示している。

4 授業改善のヒント

(1) 問題の概要

- ・指導法の工夫改善が必要な問題の概要を、過去の類似問題も含めて示している。

(2) 正答率が低い要因

- ・問題の内容や出題形式、児童生徒の学習傾向や理解の状況などのつまずきの要因を分析し、指導上の留意すべきポイントを明らかにしている。

(3) 授業改善のヒント

- ・正答率の低い要因を踏まえ、どのように指導法を工夫し、授業を改善していけばよいか、具体例を添えて示している。
- ・学年部会や教科部会などで検討を加え、組織として具体的授業改善に取り組み、児童生徒に「分かる喜び」を味わわせることが必要である。

5 教科の問題ごとの詳細データ

(1) 「領域」「問題の内容」「出題のねらい」

(2) 「期待正答率」「4県正答率」「県正答率」

- ・自校の正答率と「期待正答率」「4県正答率」「県正答率」とを比較し、これまでの授業改善の取組を振り返り、成果と課題を把握することにより、一層の学力向上に結び付けていく資料としての活用が求められている。

(3) 「誤答率」「無答率」

- ・今後、重点的に授業改善を行うために、特に無解答率に着目することが必要である。

(4) 「市町村別正答率分布」

- ・乖離の大きい問題については、充てている指導時数が十分かどうか、検討が必要である。